大会実行委員会企画シンポジウム：受験者視点から問い直すテストのあり方

企画趣旨：

近年、CBT やオンラインアセスメントの普及により、テストはますます高度化・効率化している。一方で、テストに対する公平感、長時間受験による疲労、インターフェース上の負荷、心理的負担などは、受験者の回答行動や受験意欲に影響を及ぼし、測定結果の妥当性にも関わる重要な要素となっている。しかし、これまでテストは「測る側」の論理を中心に設計されることが多く、受験者の視点からテストのあり方を問い直す議論は十分ではなかった。本シンポジウムでは、受験者の視点から、現場における実践事例を通じて、「測る側」と「測られる側」の双方にとって意味のあるテストのあり方を議論し、将来のテスト設計の方向性を探る。

司会・趣旨説明：

仁田　光彦(株式会社リクルートマネジメントソリューションズ)

話題提供者：

木村　拓也（九州大学）
分寺　杏介（神戸大学）
渡辺　かおり・甲斐　江里(株式会社リクルートマネジメントソリューションズ)

指定討論者：

鈴木　雅之（横浜国立大学）

話題提供１：回答者はリッカート尺度に本当に正しく回答できているのか？：心理尺度回答における「つまずき」から回答者視点のテストを考える（分寺杏介）

質問紙法によるテストや心理尺度では，回答者が質問項目を適切に理解し，自身の状態を正しく判断したうえで，最も当てはまる選択肢を選んでいることが暗黙の前提となっている。しかし実際には，項目内容の理解，経験の想起，自己状態の判断，選択肢への対応づけといった複数の認知過程を経て回答が生成されるため，回答者はその途中で様々な困難を経験する可能性がある。にもかかわらず，テスト研究では不真面目回答や意図的な回答歪曲には多くの関心が向けられてきた一方で，誠実に回答しようとしているにもかかわらず生じる回答上の困難は十分に検討されてこなかった。

話題提供者らは，こうした問題意識のもと，心理尺度回答における「つまずき」に関する研究を進めてきた。まず臨床心理士・公認心理師を対象とした調査では，多くの心理職がクライエントの回答上のつまずきを目の当たりにしており，その背後に多様な困難さが存在する可能性が示された。 さらに，回答者自身を対象として回答困難感の測定や回答過程の検討を行った結果，一般的な成人においても一定割合の回答者が項目への「答えにくさ」を経験しており，その背景には複数の異なるつまずき要因が存在することが示唆されている。

本発表では，これら一連の研究を紹介しながら，回答結果だけでなく，「どのような過程を経てその回答に至ったのか」という受験者の体験に着目する視点の重要性を論じる。そのうえで，リッカート尺度への回答を当然視するのではなく，回答者が経験するつまずきを手がかりとして，テストの妥当性や受験者視点を取り入れたテスト設計およびサポートの可能性について考えたい。

話題提供２：『企業の採用選考における選考ツールを応募者視点から捉え直す　―Applicant Reactions を手がかりに―』（渡辺かおり・甲斐江里）

テストの品質は、信頼性や妥当性といった測定上の観点から主に検討されてきた。一方、企業の採用選考において、応募者はテストを含む個々の選考ツールを、それ単独で経験するわけではない。応募から受検案内、受検、結果通知、面接、フィードバック、内定に至る一連の選考プロセスのなかでテストや面接等を経験し、その過程を通じて、選考手続きや企業に対する印象を形成していく。

こうした応募者側の経験に目を向ける必要性は、近年、実務・研究の両面で高まっている。採用実務では、人材獲得競争の激化や多様な情報を応募者が入手・発信できるようになった社会的変化を背景に、企業が応募者を評価するだけでなく、応募者も選考手続きや企業を評価するという側面が顕在化している。また研究においても、選考ツールや選考プロセスが応募者にどのように知覚され、その知覚が組織魅力度、選考継続意向、内定受諾意向等にどのようにつながるかを扱う Applicant Reactions（応募者反応）研究が、改めて注目されている。

本話題提供では、採用領域で応募者視点が重視されるようになった実務的背景と Applicant Reactions の研究動向に触れるとともに、日本の新卒採用における選考ツールごとの応募者の知覚、および応募者の知覚と選考参加意欲との関係を捉えた実態調査を紹介する。テストを採用選考で用いられる選考ツールの一つとして位置づけ、選考プロセスと応募者の視点を取り入れることで、テストを単独の測定手段としてではなく、企業と応募者の相互作用の一部として捉え直し、今後のテスト研究・開発・運用に求められる観点を提示したい。

話題提供３：テストのフェアネス・マネジメントの視点・論点―妥当性議論を手掛かりに受験者・制度・社会をつなぐ新たな枠組みの提案（木村拓也）

近年、CBT やオンラインアセスメントの普及に伴い、テストは高度化・効率化が進んでいる。一方で、受験者が感じる公平感や納得感、回答負荷、心理的負担などの受験者体験（Test Taker Experience）は、回答行動や測定結果にも影響を及ぼす重要な要因として注目される。本報告では、大学入学者選抜における公正観尺度（JFUCEE）の開発研究、公正/不公正知覚に関する国際比較研究、学力型と公正知覚との相関研究を事例に、「フェアネス・マネジメント」という視点を提示する。フェアネスは、テスト自体が本来的にもつ固定的な概念ではなく、制度設計・実施主体の論理、受験者の公正知覚、さらに各国・各地域の社会的・文化的文脈との相互作用の中で形成される動態的な概念として捉える。フェアネスを過剰に追求すると「フェアネス・パニック」に陥る可能性があり、重要なのはどの文脈でどのフェアネスを優先するかを管理・調整することである。

フェアネスを妥当性の議論の一部として位置付ける際に参考になるのは、テストがどのように使用され、どのように社会に影響を与えるのかの枠組みを示した、S.メシックの Progressive Matrix of Validity（Messick, 1989）であり、それをテスト政策の総合的評価な枠組みとして、テストによって社会や受験者にどのような影響や倫理的帰結をもたらすのかにまで拡張した Neo-Messickian Framework（Newron & Shaw, 2014）である。L. クロンバックが妥当性論議を、理論・証拠・社会的な価値判断が交差すると論じた（Cronbach, 1988）意味を再論したい。